



## 民間総督 三好徳三郎と台湾茶業

須賀 努（コラムニスト／茶旅人）

これまで日本統治時代に台湾茶業で活躍した何人かの日本人を取り上げてきた。だが、恐らくこの時代、もっとも有名な茶業関係者はやはり三好徳三郎であったろう。彼は台湾に約40年暮らし、一茶業者に留まらず『民間総督』とも呼ばれた日本統治時代を代表する有名人であった。

彼の足跡については、日本の台湾統治政策に関わる活動や人脈で語られることが多いのだが、今回は茶業にスポットを当てて紹介してみる。台湾人からの関心も高い人物を再度見直し、4年間の連載の締めくくりとしたい。

### 徳三郎の師、前田正名とは

なぜ三好徳三郎が茶商としての利益より、国益を重視したのか。その背景として、日本でもあまり知られていない前田正名との繋がりを考えてい。因みに前田正名と三好徳三郎の関係については『2019年12月号 初期台湾茶業に貢献した日本人～藤江勝太郎と可徳乾三(2)』の中でほんのさわりを紹介している。

『三好は前田が説く「殖産興業、地域振興」に大いに感化され、また「公への奉仕」の精神を学んでいる。更には前田に同行する中で、三好は伊藤博文、山形有朋、松方正義、樺山資紀などの知遇を得ており、辻利の販路開拓のための台湾進出にも大いに役立ったはずで、前田正名こそ、後の民間総督三好徳三郎の師だった』

徳三郎を突き動かした前田正名とはどのような人物だったのか。その生涯は祖田修著『前田正名』に詳しい。1850年鹿児島に生まれ、フランスに留学し、パリで7年を過ごし、フランス・ベルギー

の農業経済政策を学ぶ。大久保利通（前田の妻は利通の姪）らに働き掛け、1878年第3回パリ万博への出店を実現し、日本製品の直輸出への道を探っている。因みにこの時、三井物産パリ支店開設にも関わっている。帰国後大蔵省に勤務、大隈重信蔵相の政策ブレーンとして有名になっていく。

1884年には有名な『興業意見』を提出して『生糸や茶など地方在来産業の保護育成、生産流通過程の近代化』を政策に掲げたが、松方正義蔵相と対立して挫折。農商務省次官として復活するも、政争に巻き込まれた前田の意見は入れられず結局下野した。

当時前田の部下だった高橋是清は自伝で『前田君は国家と自己とを1つの物として考えた人で、私腹を肥やすなどという念慮は毛頭ない。ただただ国家本位の精神家であった』と、前田の精神を褒めて尊敬していたが、同時に『情熱家であることが欠点』とも述べ、その壮大な構想が実現しなかった理由としている。

茶業に関していえば1890年、茶業組合有志により、茶の直輸出、海外販路拡大を目的に『日本製茶会社』が設立され、前田の奔走により政府から補助金が支給された。だが前田失職後、陸奥宗光農商務大臣は原敬らと図ってこれにいちゃもんを付け、何と補助金を返還させ、会社は解散に追い込まれている。

在野の前田は諸産業の組織化を図るべく、1892年に全国行脚を開始、手始めに各地で茶業団体結成を訴えた。翌年には全国茶業者大会を開催、1894年には日本茶業会を正式に発足させている。その熱意にはすさまじいものがあり、全くの手弁当で全国を回り、私利私欲なく、日本のために行

動している。まさにこの時、三好徳三郎は前田に同行して、その思想を体感したものと思われ、台湾での彼の行動に大いなる影響を与えている。

尚前田の活動は実を結び、全国実業各団体連合大会が開催され、政府・議会への建議なども纏められるようになる。因みに前田の演説に感化され、京都で創業した紡績会社にゲンゼ（郡是）などがある。また一度解散に追い込まれた日本製茶会社も、日本茶業会をベースに、横浜の豪商大谷嘉兵衛を社長に、自主再建された。

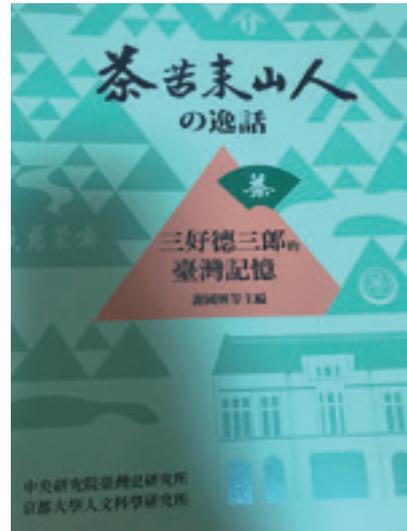
前田は明治時代に国家のために尽くした偉大な人物の一人だが、政争に敗れ、その名は忘れ去られている。京都知恩院に前田の記念碑が建っているが、塀の外の植え込みに実にひっそりと『男爵前田正名君』という文字が見えるだけだったのは何とも寂しい。



前田正名の碑（京都 知恩院）

## 宇治の三好徳三郎

その前田正名に触発され、一介の茶業者の枠を遥かに超えて活躍した三好徳三郎とはどんな人物だったのか。その生涯は『民間総督 三好徳三郎と辻利茶舗』（波形昭一著）及び『茶苦来人の逸話』（中央研究院台湾史研究所）に詳しく残されている。



茶苦来山人の逸話



三好徳三郎

徳三郎は1875年に林戸太三郎の長男として誕生。翌年三好徳次郎、アサの養子となったという。小学校の頃から腕白で、ガキ大将だった。同時に利発でもあり、1888年宇治製茶記念碑（平等院）竣工式では小学校総代として祝辞を述べた。現在平等院を訪ねると、その正門の脇に、この記念碑が残されており、その横には辻利右衛門の像が建っている。これは後に徳三郎等によって修復、建立されたものだという。



宇治製茶記念碑

1890年15歳で単身お伊勢参りに行き、帰路神戸港を見学したが資金が尽き、旅費を当時大茶商として名を知られていた神戸の山本亀次郎に無心したというから、只者ではない。1891年父徳次郎が45歳で隠居、徳三郎は僅か16歳で家督を相続している。だが家督を継いでも家業に納まる徳三郎ではなく、翌年宇治に茶業関係の青年層を対象とした青年実業協会を設立する。そしてこの年京都で前田正名の講演を聞き、その志に感動した。徳三郎の懇請で前田は宇治の茶業者向けにも講演している。

1893年になると、何と宇治を出奔してしまう。当初横浜の大谷嘉兵衛を頼るが断られ、農商務省に勤務する奥田義人宅に身を寄せたが、これは心酔している前田正名に紹介を頼むのが目的であったらしい。そしてその通り、前田正名の全国遊説に同行を許され奔走し、翌年には宇治に戻り、故郷を拠点に活動を展開している。

1895年第4回内国勸業博覧会が京都で開催され、伊藤博文、松方正義、樺山資紀らのかばん持ち、案内役を買って出て各地を案内している。僅か20歳の若者とは思えない大胆さで、大物政治家にも臆せず、非常に強力な人脈を形成していき、これが後に台湾でも生きていく。

1896年にはこの人脈を活用して、ロシア皇帝戴冠式に出席する山形有朋に願い出て、ロシア皇帝並びに各国参列者に宇治茶を献上することに成功、ヨーロッパ各国に日本茶が知られていくきっかけを作った。更には1898年皇太子に宇治行幸に際して拝謁を賜るなど、この年代ではあり得ない、突出した存在となっている。

## 台湾の徳三郎

1899年に辻利兵衛の四女、シナと結婚。同時に台湾に渡り、辻利兵衛台北出張店を開く。これは当時茶業経営が厳しかった日本国内から海外に目を向ける辻利兵衛商店の海外戦略の一環と言われており、その適任者は徳三郎しかいなかったことから、派遣されたようだ。この時、台北で行われた開店披露パーティーに面識もなかった児玉源太郎総督、後藤新平民生長官を招待（出席は無し）したことから、徳三郎は一躍台湾日本人界隈で有名になった。僅か24歳の若者、一介の茶業者の鮮烈な台北デビューだったが、日本国内で大物政治家と付き合いがあったことから、徳三郎にとってはそれほど意外なことではなかったのだろう。

來台直後の徳三郎は茶舗を軌道に乗せると同時に、総督府の台湾経営の方向性を探るため、台湾経済研究会や茶業調査委員として活動を始める。1901年には福建・香港を視察して、その結果を『台湾茶に関する意見書』として提出している。総督府では彼の意見などを踏まえて1903年には製茶試験場が設立され、それまで脆弱だった台湾茶業の大幅改良がなされることになる。

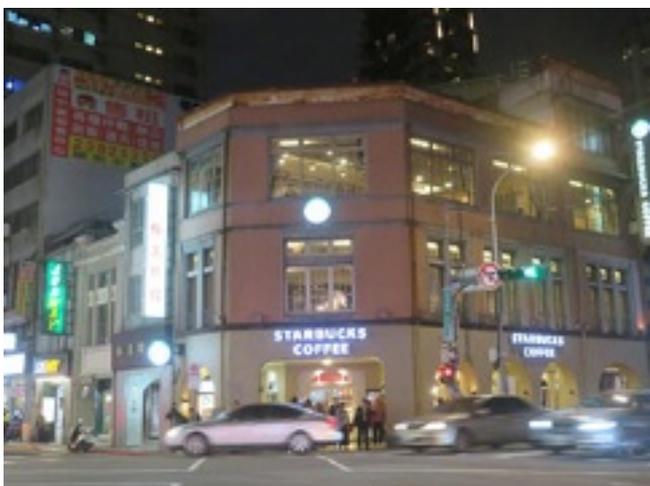
この頃徳三郎は民政長官後藤新平と台湾茶業の発展及び総督府の利益のため『台湾に一大製茶株式会社を設立する』ことを相談していたらしい。この件については、当時の大茶商横浜の大谷嘉兵衛や神戸の山本亀太郎とも交渉したようだが、結局纏まらなかったと語っている。

また限られた日本人しか招待されない台湾神社鎮座式に参列するなど、かなり早い段階から台湾日本人の名士入りを果たしている。因みにこの年、長男正雄が誕生、名付け親は後藤新平、『正雄の正』は前田正名の一字をもらい受けている。

1903年には大阪で第5回内国勸業博覧会が開催され、台湾茶を売り込む絶好の機会として、茶商公会喫茶店を準備するなど、台湾協賛会専務理事（現場責任者）として活躍している。既に京都の博覧会などを経験済みだった徳三郎にしか出来ない適役だった。内地でそれまであまり知られていなかった台湾の認知度がかなり上がり、予想以上の成果を得たと言われている。



台北 辻利茶舗



現在の辻利茶舗跡

この頃から既に台北の辻利茶舗の実務は奥さん任せで、当人は公的な世話役を多数こなし、連日の宴会続き、宵っ張りの朝寝坊だったという。ただ本業の締めは必ず自分で見ていたらしい。1904年には重慶南路と博愛路の角に新店舗を開業している。

1910年日本台湾茶株式会社が発足する。これは既に紹介した台湾製茶試験場を作った藤江勝太郎が商業生産を目的に設立した、台湾初の製茶会社である。社長は横浜の砂糖王安部幸兵衛が勤め、静岡の大茶商岡野利兵衛などが出資、徳三郎は民政長官大島久満次の要請で、監査役に収まっている。この会社が、前述した後藤と語らった製茶会社であり、台湾茶の海外輸出を日本主導（それまでは烏龍茶は外商、包種茶は華僑にその販路を抑えられ、植民地政策の障害となっていた）で行う形だったと思われるが、1918年には不振で消滅している。

1911年には低利融資査定委員となり、当時起こった台湾の水害に対する低利融資を政府から取り付けている。余談だが、この時低利融資を受けて、現在の台北林森北路一帯（光復後飲み屋街として有名）を開発したのが、徳三郎の盟友、台湾日日新報出身の木村泰治であった。

1915年には來台した沖縄県大味久五郎知事と会談し、福州からの茶の移入を阻止して、台湾包種茶の沖縄輸出を談判したと徳三郎当人が書き残している。これは台湾茶業全般を考えた国策推進の一環であるが、現在も沖縄で飲まれているさんびん茶（香片茶）、実は1930-70年代は主に台湾から来ており、そのきっかけは徳三郎であったことは驚きであった。翌年には自ら淡水に茶畑を作り、沖縄向け茶を実際に試作するという力の入れようだった。

ところがその後安東総督下で不正談合事件が勃発したことに憤慨して一切の公職を辞してしまった。この辺りの正義感も徳三郎らしい。1918年

に台北商公会副会長就任で公職復帰しているが、これは総督が明石元二郎に代わったからだろう。この時期盟友杉山茂丸（日本政界の参謀役）が來台し、明石総督への支援要請を受けていたようだ。

1920年には台北州協議会員となり、そして1923年時の皇太子（後の昭和天皇）の台湾巡行中に拝謁し、緑綬褒章を下賜されている。1927年総督府評議会員となり、翌年勲五等瑞宝章を受け、この頃から誰言うともなく、民間総督と呼ばれるようになる。

だが1930年、茶業を任せきりだった妻シナに先立たれてしまう（享年48）。1934年には開業35周年を期して、家業を長男正雄に譲る。1939年台湾官民代表皇軍慰問使に参加して、厦門、広東を訪問。帰国後体調を崩し、台湾で死去（享年65）。ちょうど台湾在住40年、まさに台湾の日本人を代表する人物となり、各種公職、公共事業に積極的に関与し、官民融和を図り、何よりも台湾の為に身を捧げた人生だった。台湾日日新報には『祭りには欠かざる人物、公共事業には欠くべからざる顔』と評されており、その功績の大きさは、計り知れない。

## 台湾辻利茶舗



台北 辻利茶舗

辻利茶舗についてはすでに『2018年4月号（7）

日本統治時代 台湾にも緑茶があった?!』で緑茶販売に関して、簡単に紹介しているので、再掲してみる。

『ちょうどその頃、台湾に進出していた京都の辻利が『苗栗庁農会製造、三叉河の緑茶、新茶発売』の広告を打ったのは1908年のこと。当初は台湾在住日本人向けに宇治茶などを販売しており、同時に台湾茶の輸出も目論んでいたようだが、この時期は台湾産緑茶にも目を付けており、日本内地にもサンプルを送り、その販売ルートを探っていたらしい』

上の緑茶の例でも分かるように、当時辻利では、宇治産茶の販売だけではなく、台湾茶の販路拡大、品質向上などの研究を行っていた。その結果1910年に高知で開催された第3回全国特産品博覧会に自前の特製烏龍茶を出品し、有効金賞牌を得るなど具体的な成果も出ていた。

また台湾全体の茶業発展を常に考えていた徳三郎は、世界の茶業界と競争するには、資本の投下が必要であることを十分に認識していたと思われる。前述の日本台湾茶（株）の設立に関わるなど、台湾茶業で軸になる企業の養成も視野に入っていたが、事はそう簡単ではなかった。

1920年代には、台湾での紅茶（後の日東紅茶）製造を熱心に進めていた三井の理事長団琢磨の相談相手にもなっていた。社内の反対を押し切って台湾紅茶事業を進めた団の存在がなければ、今も日本で売られている日東紅茶は生まれなかったと思われるが、その背後に徳三郎の支援があったことはほぼ知られていない。

尚当然のことではあるが、生産が軌道に乗った日東紅茶の台湾内の販売は全て辻利が取り仕切っている。徳三郎が亡くなった1939年の台湾の新聞広告を見ると、日東紅茶は『純国産』と謳われ、製造元は日東拓殖、発売元は三井物産、台湾島内の販売は辻利茶舗、と書かれていることからそれがわかる。だが時局は戦争に向かい、徳三郎と辻

利茶舗の努力も泡のように消えていった。



日東紅茶広告

## 祇園辻利

戦後台湾から、カバン一つで引き揚げてきた三好家の人々は、1948年八坂神社の近くに、祇園辻利を立ち上げた。この辺りの事情については、徳三郎の孫で湾生の通弘氏（1970年に社長就任）に話を聞ければ、様々なことが分かったかもしれないが、残念ながら2019年にこの世を去られてしまい、今回はコロナ禍の京都をひっそりと歩くだけとなった。

因みに祇園辻利の店舗の近くに建仁寺がある。



栄西禅師 茶碑



京都 祇園辻利

京都の建仁寺と言えば、栄西開祖の寺院であり、境内には『喫茶養生記』にちなんだ『平成の茶苑』という一角がある。そこには『栄西禅師 茶碑』という大きな碑が建っているが、この碑に三好通弘氏の名前が刻まれている。

祇園辻利の開店には、三好正雄夫人、喜久さんの「八坂神社のお膝元、多くの人が行き交うこの街で商いをしたい」という思いが大きかったという。喜久さんといえば、台湾で舅の徳三郎によく仕え、徳三郎の貴重な記録を引き上げ荷物に忍ばせて持ち帰った人物として知られている。

その後の祇園辻利は、様々な時代を生き抜き、抹茶パフェなどのスイーツも人気となり、外国人観光客にも知られる店となった。そして分家である小倉辻利が最近台湾へ出店し、更に海外展開を加速し、辻利の名が海外でも知られるようになっている。今回三好徳三郎を取り上げたのも、台湾人茶業者からの要望であり、台湾茶業ゆかりの日本人への関心はどんどん高まっている。

これまで4年間、日本及び台湾茶業関係者などの大いなる支援を受け、23回にも渡り台湾茶の歴史の一端を書かせて頂いたこと、誠に感謝している。台湾茶の歴史は台湾の歴史そのものであり、読者がお茶を通じて台湾により関心を持ち、台湾をより深く知る機会となっていれば幸いである。